

な  
ま  
きゅう  
投げろ魔球!

かい  
と  
しゅ  
カバ怪投手

川村たかし  
宮本忠夫  
絵作



こども文学館 41

定価 780 円

## 投げろ魔球！ カッパ怪投手

発行 1983年12月 第1刷 1984年5月 第5刷

作家 川村 たかし (かわむら たかし)

画家 宮本 忠夫 (みやもと ただお)

発行者 久保田 忠夫

発行所 株式会社 ポプラ社

〒160 東京都新宿区須賀町5

振替東京4-149271

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 島田製本株式会社

落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

NDC 913/182p/22cm 8093-095041-7764

Printed in Japan © 川村たかし 宮本忠夫 1983

な ま きゅう  
投げろ魔球!

かい どう しゅ  
カッパ怪投手

川村たかし 作 宮本忠夫 絵



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

まえがき

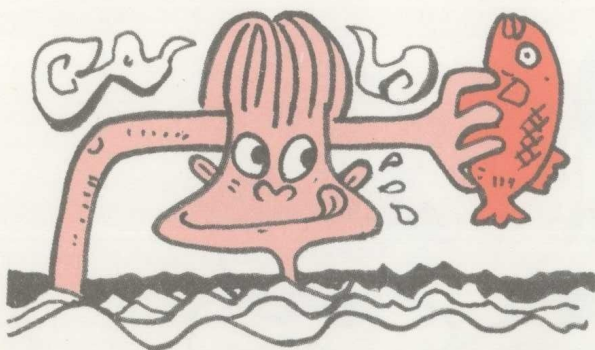
河童<sup>かっぱ</sup>って

おもしろい

それがプロ野球<sup>やきゅう</sup>の

投手<sup>ピッチャー</sup>になつたんだもの

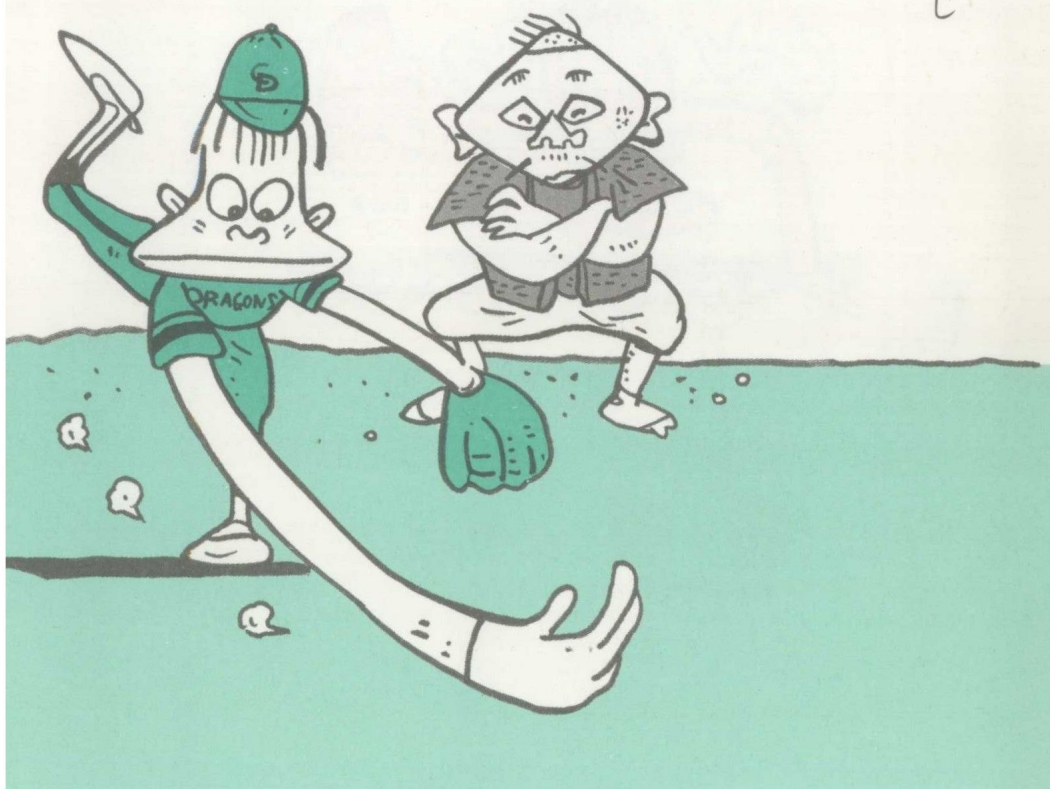
もつとおもしろい





投げろ魔球！ カッパ怪投手／もくじ

- 1 あるじが棒を釣りあげること 8
- 2 ムラサキギモねらわれること 18
- 3 百メートルのストライクのこと 27
- 4 妖怪退治のこと 35
- 5 入団テストを受けること 45
- 6 背番号は0番に決まること 54
- 7 雨のなかではぼうしをぬぐこと 62
- 8 陰謀うずまくこと 70
- 9 うっかりしてうつむくこと 78
- 10 キングス秘策をねること 87
- 11 野球場がわきたつこと 93
- 12 すごごとひきさがること 101
- 13 三百四十七人がおしかけること 109
- 14 コーチは作戦をたてること 116



- 15 ひとりずもうに敗れること 124
- 16 頭からかぜをひくこと 136
- 17 決戦のときがせまること 148
- 18 決戦をむかえること 156
- 19 山童の子孫と戦うこと 164
- 20 音賀良にげること 176
- あとがき 181





▶作家・川村たかし（かわむらたかし）

1931年、奈良県に生まれる。奈良教育大学卒業。現在、梅花女子大学教授、日本児童文学者協会・日本児童文芸家協会会員。

作品に『山へいく牛』（野間児童文芸賞・国際アンデルセン賞優良作品賞）ライフワークともいえる大長編シリーズ『新十津川物語』（既刊5巻）（路傍の石文学賞）の他多数ある。

現住所 奈良県五條市新町2-1-14

▶画家・宮本忠夫（みやもとただお）

1947年、東京に生まれる。作品に「えんとつにのぼったふうちゃん」（絵本にっぽん賞）「ゆきがくる」（サンケイ出版文化賞）、ほかに、「となりのミッチャン」「さよならムッチャン」「ルミちゃんの赤いりボン」「ケイコちゃんごめんね」「じゃんけんボンじゃきめられない」などがある。



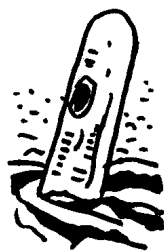
投げろ魔球!

かいとうしゅ

カッパ怪投手

川村たかし 作 宮本忠夫 絵

1 あるじが棒を釣りあげること



主人 これはこのあたりに住まいいたすガタロに候。今日は魚を釣

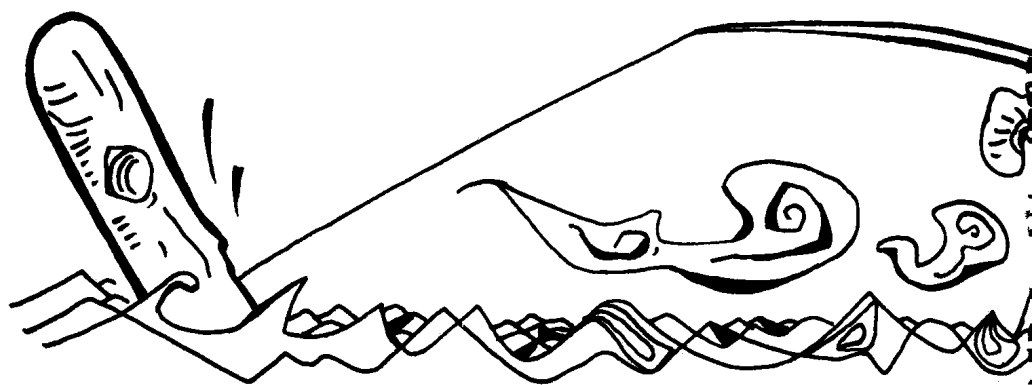
ろうと存じ、海べりに参つてござる。ところするうち、針を  
なぶる者があらわれてござる。

河童 今の声はたしかにガタロと聞こえまいた。ガタロとは河童の

ことでござれば、待ちかねた救い主にちがいなかるう。ちと  
気をひいてみようかと存ずる。チョイチョイチョイ。

主人 さても強いひきにござる。もしかしてクジラでもあらわれて  
か、いやクジラではござらぬ。細うて黒うて長いものが針を  
なぶつてある。したがイルカではない。オルカでもない。フ  
カでもない。波の合い間に見ゆるはどうやら太い棒されのよ  
うに思わるる。

河童 やれうれしや、気づいたと見ゆる。もうすこし糸をひきこん



でくりよう。チヨイチヨイチヨイ。

主人

そろそろ頃あいでござる。さあてひきあげましょう。(主人、まるたん棒を岩の上によこたえる。まるたはぴくんとはねる) はて奇妙な棒きれ。穴がくりぬいてあるかと思えば、はしがまるうなつて全体がなにやら田んぼのかかしめいて見ゆる。さりながら木ぎれが針に食いつくとは合点が参らぬ。なんとううすきみ悪うなつた。このまま去のうと存ずる。

河童

あつ、もうし。ここなおひと。

主人

げつ、呼ばわつたか。

河童

呼びました。こなたさまをガタロと知つてお願いがあります。そのあたりにもう一本木ぎれがただよつておりませぬか。わたくしよりは細うて、もしかすると太刀魚か海蛇などに見ゆるやも知れませぬ。そいつを釣りあげてくだされ。

主人

はてさて厄介なことになつたものでござる。魚を釣るつもりがまるたん棒をひきあげたばかりか、そやつが奇怪にも口をきく。目をつぶつたまま声ばかり聞こゆる気味悪さはたとえようもござらぬが——。なるほど、潮だまりにひよいひよい



立ちあがるものがござる。それぞれ糸につかまれ。(主人二本

めのまるたを釣りあげる。まるたはびくりとはねる)

河童 ひきあげてくださりまいたか。されば細い棒<sup>ぼう</sup>きれを、わたく

しめの穴<sup>あな</sup>にさしこんでくだされ。

主人 やれやれ。では、さしこみまする。

河童 (ひょいとすわりなおして、目をぱちくりさせて) おおきにあ

りがとさんでござります。

主人 いやあ、棒きれと見たものが一つになったとたん、命<sup>いのち</sup>ある

かのように起きなおって頭などべこべこ下げ<sup>さ</sup>おる。まあ、た

まげた、いったいこなたは何者<sup>なにもの</sup>でござる。

河童 名のるまえにまるはだかも恥<sup>は</sup>ずかしゅうござりまする。なん

ぞからだをかくすものをお貸<sup>か</sup>しくだされ。

主人 レインコートを貸しましょう。

河童 わたくしはオンガラボウシともします。ひとなみに文字に

書けば音賀<sup>おんが</sup>良法師<sup>らほうし</sup>まことは河童<sup>かっぱ</sup>でござる。

主人 ははあ河童でござるか。その河童がなにゆえ胴<sup>どう</sup>が一本、手が

一本にわかれて海中をただようておりまいたか。



河童 これにはわけがござりまする。わけを話しましょう。

主人 わけを聞きましょう。さりながらもはや夕ぐれにござれば、

まずこなたの住まいに参り、フジツボなどついたからだを清め、物語など聞こうと存ずる。

河童 かたじけのうござる。魚はもうようござりまするか。

主人 よいよい。こなたの話を聞いて酒を食べようと存ずる。はや、つきまいた。ずいとおられませ。

河童 はあ、ずいとおればうらの川つぶちへ出まする。部屋というても一つだけ、戸というてもむしろ一枚ぶら下がる。こなたのなりわいはなんとでござりまする。

主人 暮らしむぎのことをおたずねある。なりわいはガタロにござる。

河童 はて、商売がガタロ——でござりまするか。

主人 さよう、川にはいり、流れ下る金めの物を拾うて暮らしをたててござる。ときには砂をさらい、ときには鉄、銅、砲金などを探しまする。水にはいり川で暮らすによって河童、すなわちガタロの川岸徳次郎。



河童 はて、みょうな商売でござりまするな。

主人 みょうな商売でござる。金めのほかにはアユ、ウナギなども捕え、スズムシ、カブトムシなども集めまする。

河童 さてもこなたがガタロともうされたわけが今になってわかりました。あるじのが人間のガタロ、わたくしめがガタロの音賀良法師。なにやらややこしゅうござりますなあ。さて、からだをぬぐいまいた。フジツボもとりました。湯を飲んでやつと生きかえりまいたれば、海に流れておりまいたしだいを物語ろうと存じます。

主人 はや物語れ。

河童 かしこまりました。今を去る何百年ものむかし、ある大きな宮社をこさえることとなりましたおり、人手がたりませぬ。

やむなく大工が人形をつくり、普請を手伝わせましたが、宮社ができあがっては人形がじゃまになります。焼こうとする

主人 と大工がふびんがり、河へはなつことになりました。そのときから人形はことごとく河の童となりまいた。





河童 河に住んで魚を捕えても、もとは大工がつくったオンガラボ

ウシ。ときにはひとに薬をおしえ、碗や皿を貸し、陸と水で  
仲良うに暮らしております。が、上流に大雨がくると、こ

ろがり水が川を走り下ります。そのたびに河の童はひとり命  
をうしない、ひとり濁流にさらわれてしだいに数を減らし、  
やがてわたくしひとりになりました。

主人 ふーむ、それは気のどくをいたいた。まず酒を一杯飲ましめ。

河童 フーッ、飲みました。熱い火のかたまりがふさがっております。

いた胸に穴をうがって、落ち沈むかのようでございます。

主人 ひとりとなつてから、いかがいたした。

河童 そのことにござります。ひとりとなつては用心に用心をかさ

ね、雨もよいとあれば川をはいだし、嵐とあらば山にかくれ  
などしておりますが、あるとき村の若衆に角力を所望して  
ございます。はい、力自慢の大男でござりました。

主人 ふむふむ、もう一杯飲め。ドブリドブリドブリ。

河童 クッ、飲みました。ああうまい。この酒が、しくじりのもと  
でござりました。



主人 はて、大男の話であろうが。

河童 されば男はわたくしを見おろし、なんじゃ子どもか。角力<sup>すしう</sup>と

ろとは、あほらしやの鐘<sup>かね</sup>が鳴る、ともうします。かかえた酒<sup>さけ</sup>壺<sup>つぼ</sup>をおいて、さあたかつて参<sup>まゐ</sup>れと手をひろげました。

主人 たかつて参れ、とか。

河童 さようで。タカレと。あるじどの、さいそくがましゅうある

が、いま一杯<sup>はい</sup>ついでください。ウルッ、うまい。はて、どこまで話しましたことやら。さよう酒壺<sup>さけ</sup>をおいたところまででござりましたな。タカレ、もしこなたをみごとに投げとばせたら、この酒をくれよう、ともうします。壺<sup>つぼ</sup>ごとまるまるくれよう、そのかわり勝<sup>か</sup>てばおまえを連れ帰<sup>かへ</sup>ってしもべとする。

主人 いかがであった。

河童 勝ちました。カッパは七人力、牛は八人力、負<sup>ま</sup>けるものではありません。めだたいこととござるによって、さ、なむなむとついでくださりませ。ドブリドブリドリ。破<sup>やぶ</sup>れ小屋<sup>こや</sup>にしては良い酒を飲<sup>の</sup>むものでござる。イヤ、あのとときも壺<sup>つぼ</sup>の酒を



主人

ことごとく飲みほし、ころりと寝こみましたが。夜中（よなか）にころがり水（みず）がおそいかかって参（まゐ）ろうとは、神（かみ）ならぬ身（み）の知るよしもありませなんだ。ウーイ、もう一杯（ばい）。

さてもやっかいな者を連れ帰ったものじゃ。とはいえ物語はおもしろい。それ飲め。ころがり水はいかがした。

河童

気がついたときは渦巻（うずま）く濁流（だくりゅう）のなかで、ふみとどまるすべもござりませぬ。なにやらに頭を打ちつけ、それきりわからずになりました。どれほどかすぎてふと我（われ）にかえったのはひろびろとした海原（うなばら）のまったなかでござりまいた。水が塩（しお）からい。げっとなります。さよう川河童（かわかつば）は塩水（しお）にあうと、全身（ぜんしん）の力がぬけ落ちるものでござりまする。なればこそ、これまでも海に流されたなかまたちは二度ともどりませなんだ。はつと気がついたときのわたくしめの驚（おどろ）きはおわかりいただけましょう。しびれたからだから腕（うで）がぬけていくのでござります。大工（だいく）どのがさしこんだ腕（うで）が、一本の棒（ぼう）になってぬけていく。ああどこからか海河童（うみかつば）があらわれて、早（はや）う川（かわ）まで連れていってくださらぬか。早（はや）う早（はや）う、今（いま）ならまにあいまするぞ、叫（さけ）び